

どの人も、医者相手は患者さんであることに違いはない。」格別に神経を使う「などと云ったら、誤解を生む。が、子供は別だろう。

もうすぐ2歳になるC子ちゃん。転んで、おでこをぶつけた。大きなコブができている。受傷後すぐに泣いたが、ウトウトしだったので、お母さんが大騒ぎするようになった。顔色は普通で、鼻出血もない。寝顔は、泣き疲れて寝込んだという感じである。

頭の中に、異常はないと思われる。が、お母さんは、意識障害を起こす頭蓋底骨折くわんがいどうしや急性硬膜下血腫などを心配しているようである。確かに、それを100%否定できるわけもない。そこで、頭CT（ノンピューター断層撮影）の検査をすることにした。スタッフが緊張して準備をする。と、いきなり「CTって、放射線は大丈夫ですか？」と、お母さんが言い出したのである。

放射線被ばくについて、ことに若い人たちは敏感なようだ。頭のCTを撮ると、がんになるのではないか？脳腫瘍は大丈夫なのか？などと不安がる人もいる。だが、放

射線被ばくによる発がんの危険性は、100ミリシーベルト以下ではないとされている。CTでの被ばくは、多く見積もっても20ミリシーベルトを超えることはないという。だいたい、日常生活でも自然界の放射線を知らずのうちに浴びているのだ。1年間に浴びる放射線の量は、胸のレントゲン写真10枚以上に相当するという。だから、C子ちゃんも被爆の心配はないはずである。

もちろん、なんでもCT検査をするのではない。頭部打撲後に、機嫌や顔色が良くて陥没骨折がなければ経過を見る。が、4、5歳以下の子供は、たいへんなのだ。泣き叫びちびギャングと、不安でいっぱいいっぴいの若いお母さんを相手に、いつも老医は入とくことである。

（石黒修三いし黒しゆいしへろクリニック・脳神経

外科専門医…5/16北國新聞掲載）